

日本語における非対格性について

庄村（一瀬）陽子

本論文では様々な言語で報告されている非対格性が、日本語にも観察されることを示す証拠について検討する。今回は提出されている7つの言語事象を取り上げる。まず宮川（1989）の数量子遊離、辻村（1990, 1994, 1996）の結果構文、竹沢（1991）の「テイル」構文、影山（1993）の格助詞脱落、影山（1993, 1996）の「たくさん」構文、岸本（1996）の「かけ」構文である。そして最後に宮川（1989）、辻村（1990）らの漢語複合動詞を概観してまとめに入る。